

妙安寺だより 法話特集号

仏説 桃太郎(3)

前回、大きな桃を沢山な桃と解釈したのには理由があるのです。というのは、『桃』という字は、「木」へんに「」と書き、「数えきれないほど多い」という意味があります。

少し話が脱線しますが、この「桃」について考えてみましょう。

「もも」の語源は「まみ（真実）」の変化したものといわれ、また、実が赤いところから「もえみ（燃実）」「もみじみ（紅葉実）」が変化したものとも言われ、中国では、漢の時代から、節句には桃の枝を門前に挿し、死霊や邪気をうまじないとしていました。

日本のことわざに「命長ければ、に会う」があります。この「蓬莱」とは、古代中国の伝説の山で、東方の海中にある不老不死の仙人が住む所で、これを「」と呼び、古代から桃が不老長寿の妙薬とされていたことがわかります。

また、桃の字の「兆」には、吉兆や兆候のように「に現れたし」という意味と、左右に「離れて割れる」という意味があります。

それでは、なぜ「モモ」を桃と記すようになったのか、それは、桃の実が左右二つに割れるからで、「ももわれ」と呼ばれる昔の娘さんの髪型も、この二つに割れるところから出たものといわれています。

同じ種類に属する「スモモ」は、「李」と書かれ「木+子」からなっています。

これは、スモモが枝もたわわに実をつけるところから「子沢山」を想起（おもいおこすこと）させ、その強い酸味は妊婦のつわりを抑えて安産に導くといわれることから、「木」の下に「子」を添えて「子育ての木」という意味を表しています。

中国では、スモモは「喜慶子＝おめでたい実」と呼ばれ、女性が子宝に恵まれるシンボルとされていました。

川に流れてきた「桃」というのは、たぶん「スモモ」の事ではないかと思われまます。

川で拾ってきた「桃」を、おじいさんとおばあさんは毎日食べているうちに、若返っておばあさんは、赤ちゃんを生んで、その子に「桃太郎」という名をつけました。

おじいさんとおばあさんは何歳だったのか？ 桃を食べて何歳くらい若がえったのか？ どんな暮らをしていたのか？ いろいろと？マークが出てきました。

今回は、桃太郎の絵本を参考にしながら、この疑問を解決していきます。

